ひょうご人権ジャーナル

きずな KIZUNA

2023年 令和5年 2

特集 社会と人権

自分らしく生きる

INDEX

2 「多様な性を尊重できる社会へ」
清水　展人さん（非営利型一般社団法人日本LGBT協会　代表理事）

3 「サプライチェーンにおける人権の尊重を目指して」
名越　正貴さん
（EY 新日本有限責任監査法人　気候変動・サステナビリティ事業部 シニアマネージャー）

4 「LGBTQフレンドリーな健康診断」
大西メディカルクリニック

5 「コミュニケーションが取れるっていいな」
兵庫県福祉部ユニバーサル推進課

6 「ありのままでいられる…そんな場所がある。
ーひきこもり支援の現場からー」
兵庫県立神出学園

7 「アイヌ料理を食べながら日本の食文化について考えてみる」
瀬川　拓郎さん（札幌大学　教授）

8 情報ぷらざ

ひろげよう こころのネットワーク

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会
兵庫県マスコット　はばタン

人々の価値観や考え方が多様化し、人権問題も複雑になっています。すべての人々が互いの違いを認め、尊重し、助け合うことのできる共生社会の実現に向けて、人権問題を自分ごととして考えられるよう理解が必要です。
本号では様々な人権問題に触れ、互いに人権を尊重し合うことの大切さについて考えてみましょう。

特集 社会と人権

多様な性を尊重できる社会へ

非営利型一般社団法人
日本LGBT協会 代表理事
清水（しみず） 展人（ひろと） さん

私は兵庫県神戸市で3姉妹の長女として誕生し、その後西宮市、淡路市、加古郡でも暮らしていました。現在は戸籍上男性となり17年が経ち、2児の父として家族を養っています。兵庫県を含め全国各地や海外で講演を行ない、執筆、ラジオのパーソナリティや医療専門学校で臨床心理学などを教えています。

女の子らしくしないのか

そんな私は幼少の頃から服はズボンを選択し、おままごと、お人形さん遊びよりも外遊びを好んでいました。

小学校に入ってからはズボン姿の私を見て友達だけではなく大人からも「どうしてもっと女の子らしくしないのか」と度々言われるようになりました。

性への固定的な発言によって私はついに学校へ通うことすら恐怖を感じはじめます。「男女（おとこおんな）！おかま！」など数々の嫌だと感じる言葉をかけられました。意図的な言葉だけではありません。「男の子の中でサッカーをしたい人はいないか」限定される言葉の奥に〝この先生（大人）は女子はこういうスポーツをしてはいけないと思っている〟と子どもながらに感じていました。選びたい色、選びたいデザイン、選びたいスポーツ、選択できずに我慢が続きました。

中学校でも同じく、大人に相談したいけれど、固定的な発信が続く環境の中で安心して自分を打ち明けることは難しく、日々ズボンを選択していた私が、指定の制服（スカート）を履かなければなりませんでした。学校教育では生殖に関わる性教育、体の発育に関する内容が繰り返され、その度に女性を好きになる私は孤立感と自己否定を繰り返しました。県立西宮高等学校時代を経てその後、保健体育科の教職員免許を取得した大学時代も何度も自分の生まれてきた意味を見失いました。日々、人からジロジロ見られ「男なのか、女なのか」と言われるのです。2極化、分類、そんなに大切なことでしょうか。家族と葛藤しながら病院で性同一性障害（性別違和）と診断されてからも、将来の光が見えずに苦しい日々を送っていました。

大学卒業後、男性として勤めたかった私ですが芦屋市で女性戸籍として勤務、仕事にやりがいはありましたが違和も続いており、貯金したお金で手術を受けました。その後、尼崎の家庭裁判所で性別及び氏名を「展子（ひろこ）」から「展人（ひろと）」に変更。男らしさ、女らしさを教育するのではなく、「人を大切にしてほしい」そんな想いも含んでいます。

自分らしく生きること

呼吸が苦しくなるほど、何度も自分らしく生きることを諦めかけましたが、自分の信念を持ち続け、現在はパートナーと結婚し11年が経ち、体外受精により2人の子どもに恵まれ私も自分を肯定できるようになり、笑顔も増えました。

これからの子どもたちには生まれもった性や生き方を肯定できるようになってほしいと思っています。

制度、レインボーマーク、誰でもトイレができれば終わりではありません。なぜSOGIハラスメント対策が義務になったのか。なぜ多様性を尊重する制度や仕組みが必要となっているのか。原点には、苦しんできた人、今も心を痛めている人がいることを忘れずに、方法論だけではなく、当事者の声や実情に耳を傾け、知ることからはじめてほしいと考えています。一人ひとりが大切にされる地域、学校、企業へ。最後まで読んでいただき感謝致します。

プロフィール

●B・fm791「清水ひろとの広がるラジオ」水曜日放送　パーソナリティ ●医療専門学校 非常勤講師 臨床心理学 医学総論他 ●性的マイノリティ特設　専門電話相談員(兵庫県下　一部担当)【保有資格】 中学校二種教育職員免許（保健体育科）/作業療法士免許（精神/身体） 他【TV・新聞出演】多数【著書】『アメリカ・ロサンゼルスにおけるLGBT支援の現場』総合教育出版『今とこれからがわかるはじめてのLGBT 入門』主婦の友社（教養・社会ランキング1位）他

お問い合わせ
Mail：hiroto.simizu1010@gmail.com　まで

LGBTQフレンドリーな健康診断

大西（おおにし）メディカルクリニック

加古郡稲美町国岡2丁目9-1
TEL:079-492-0935
https://hinode.or.jp/establishment/onishimedical/

2021年6月よりLGBTQフレンドリーな健診の取組を始められました大西メディカルクリニック健診室の久城さんにお話を伺いました。

Q LGBTQフレンドリーな健診を始められたきっかけ

A 副理事長のもとに「受診したくても受けられない方がいる」と相談があったことがきっかけで、当事者の方の状況を知りました。それがLGBTQフレンドリーな健診室へと進めるきっかけとなりました。

Q どのような取組みをされましたか

A まず、誰もが安心して過ごせる医療機関の実装プロジェクトの活動をされている「まるっとインクルーシブ病院」のきむ先生をはじめとするプロジェクトメンバーの方々に講師として来て頂き、研修を行いハード面などの指摘を受けました。例えばトイレを「だれでもトイレ」とし、表示することにより性別に関係なく利用しやすい環境にしたり、設備の改良が難しい更衣室については、特定の健診以外は更衣室を利用することなく着替えなしで健診を受けられる体制にしました。

そして取組みを進めて行く中で、自分たちの取組みがどこまで出来ているのかを確認してもらうために当事者の方にも来て頂き、確認およびアドバイスをいただきました。当事者の方は、呼び出しの際、見た目と名前が違うことで、周囲の方の反応を気にされているということや、性別自認は女性であるのに、男性として扱われることに違和感があるなど様々な内容を伺い、すぐに方法を考えました。また取組み以前から、検査着の色分けをしていなかったことなど、継続していく内容と、新しく改善する内容を明確にし取組みを進めていきました。

Q これからの取組みについて

A これまで当事者の方がどの程度健診に来ていただいたか把握することはできていません。それはすべての方が同じように健診を受けられる体制を整えているからこそ、当事者の方と限定せずに健診を進めているからです。今後は今いるスタッフだけが対応できるだけではなく、新しく入るスタッフと共に継続していける体制を整えることが課題だと考えています。この取組みを行うことによりLGBTQの方だけでなくその他の方にとっても受診しやすい健診室へとつながっていくと考えています。

これからもより一層、だれでも安心して健診が受けられる、地域に根差したクリニックをめざして参ります。

コミュニケーションが取れるっていいな

兵庫県福祉部ユニバーサル推進課

兵庫県では「ユニバーサル社会づくりの推進に関する条例」に基づき、県民の多様なニーズに応え質の高い県民サービスを行う「ユニバーサル県庁の確立」に取り組んでいます。その一環として、話し言葉に代わる意思伝達ツールである「コミュニケーション支援ボード」の窓口での活用を推進しています。

コミュニケーションのバリアフリー

社会の中で私たちは、主に話し言葉によって自分の気持ちや状態を伝えながら生活しています。しかし、知的障害や聴覚障害、言語障害のある人、外国人などにとっては、その話し言葉によるコミュニケーションが困難な場面が多くあります。

そこで、話し言葉によるコミュニケーションにバリアのある人たちと周囲の人たちとの間をつなぐため、コミュニケーション支援ボードを用意し、地域のさまざまな場所に設置し、コミュニケーションのバリアフリーを目指していきます。

こんな時はコミュニケーションボードの出番です

○当事者が困っているとき
コミュニケーションがとれずに困っている
そわそわしている
ぶつぶつ言っている

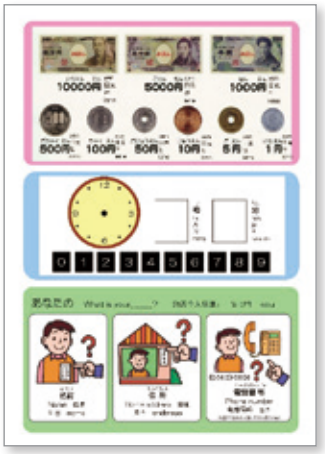
○対応する側が困っているとき
言葉の意味が通じない
何を伝えたいのかが分からない

コミュニケーションボードの1ページ目に最初に尋ねることがまとめてあります。

関係する絵と日本語、英語、中国語、韓国語が書いてあり、何を伝えたいかのコミュニケーションが取れるようになっています。

さらに具体的なやりとりが必要なときは、2ページ目以降を見せてください。

お金や時間など、より具体的な内容の絵と文字が配置されています。



言葉だけでなく絵によるコミュニケーションも難しいという人がおられます。そんな場合には、実物を示して「どっち?」と聞いて選択してもらう方法を試してみてください。

利用する場所ごとにコミュニケーションボードを作成していますので、ぜひ活用ください。

コミュニケーションボードは下記ホームページよりダウンロードしてご利用いただけます。

https://web.pref.hyogo.lg.jp/kf10/communicationboard.html

詳しくは兵庫県福祉部ユニバーサル推進課まで
電話:078-362-4379　FAX:078-362-9040
Eメール:universal@pref.hyogo.lg.jp

ありのままでいられる…そんな場所がある。

―ひきこもり支援の現場から―

兵庫県立神出学園
神戸市西区神出町小東野30
TEL:078-965-1122
FAX:078-965-1123
https://www.kande-gakuen.jp/

2016年内閣府調査によると、15歳～39歳までのひきこもり人口は約54万人と推計されています。さらにひきこもりから立ち直れなかった若者やひきこもりの人を抱える家族が高齢化しており、50代の当事者を支える親が80代となり、社会的に孤立を深め、経済的にも困窮する「8050問題」が大きな社会問題となっています。

兵庫県は、1994年に全国初の公立宿泊型フリースクールとして県立神出学園を設立しました。学園では、学校に適応できず不登校やひきこもりの経験を持つ若者たちを対象とし、学校とは違う、一人ひとりに応じた個別的な支援を行っています。設立されてから28年が経ちますが、800人を越える若者たちが、自分の生き方を見つけ巣立っていきました。

県立神出学園の支援

私たち学園スタッフが最初に出会うのは心が傷つき、自信を無くした状況の若者たちです。

このような若者たちが、自然豊かな環境の中、自身の興味に応じて参加することができる動物飼育や農園、料理、スポーツなどの多彩な体験プログラムを通じて、コミュニケーション能力や共生の心を培い、自己認識を高め、自分の生き方を見つけていきます。全てのプログラムにおいて学園生の「したい・作りたい」という気持ちを大切にし、小さなチャレンジを積み重ねていく「スモールステップ」によって自己肯定感を持てるようにしています。また、臨床心理士によるカウンセリングを通じて、学園生は自己理解を深め、心の安定を得ています。

これら学園生活での様々な体験が、自尊感情高揚（※1）へとつながり、自信を取り戻していきます。

神出学園のノウハウを生かした1日交流体験

神出学園が28年間の不登校・ひきこもり支援で培ってきた知識や環境を、県内のひきこもりの若者に対する支援に活かすため、隔週の金曜日に「1日交流体験」を実施しています。中学生から概ね40歳までの不登校・ひきこもりの方が対象です。最初はみんな緊張気味ですが、アイスブレイク（※2）などでリラックスして参加してもらえるよう工夫しています。午後からは他の参加者とかかわりながら社会性や生活スキルを身に付けられるプログラムを用意しています。のんびり、楽しいひと時を過ごすうちに、受け身な姿勢から徐々に能動的になり、表情も和らいできます。「1日交流体験に参加した日は、夜、ぐっすり眠れます」という参加者もいます。

おわりに

ここで生活をするすべての若者たちが不登校やひきこもりを経験しています。そのため、お互いが取り繕うことなく、自分のありのままでいられる場所が神出学園です。

※1　自尊感情高揚についての実践報告は当協会発行の研究紀要二十四輯に収めています。

※2　初対面の人同士の話し合いのきっかけを作ったり、緊張を解きほぐすための手法や、人を和ませ、コミュニケーションを取れる雰囲気をつくる技法のこと。

アイヌ料理を食べながら日本の食文化について考えてみる

札幌大学　教授
瀬川（せがわ）　拓郎（たくろう）　さん

プロフィール

1958年札幌市生まれ。専門はアイヌ考古学。おもな著書に『アイヌ学入門』『縄文の思想』(いずれも講談社現代新書)、『アイヌと縄文』(ちくま新書)など。

異文化を体感

私は以前勤めていた博物館で、アイヌ文化を紹介する講座を行っていました。なかでも評判がよかったのは食文化の体験です。

ふだん口にすることのないクマやシカ肉、名前も知らない山菜が用いられた料理は、異文化への興味をそそります。サケの氷頭と生のエラ、白子などをたたいて強い粘りを出した料理からは、北海道の風土が匂いたつようです。

ただし、煮込まれてしまったジビエや山菜は、おいしい汁物ではあっても、味覚的にさほど意外なものではありません。私が気に入ったのは、豆とカボチャをやわらかく炊いた料理です。かつては魚油や獣脂で調味し、ドングリを用いる地域もあったようですが、カボチャの甘さのなかにミカン科のキハダの実がレモンのように香り、異文化を強く体感しました。

料理をめぐる本州とアイヌ

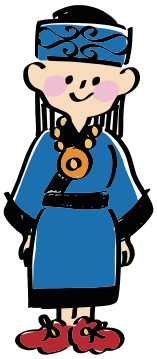
アイヌ料理の味付けはどれも塩です。この塩は本州から交易で入手していました。塩だけでなく鍋や汁椀なども本州産です。アイヌの暮らしは、多くの本州産品で成り立っていました。しかしこのことは同時に、多くのアイヌ産品が本州へ出荷されたことを示しています。

無塩で鰹節のように硬く乾したアイヌの干鮭(からざけ)は、中世以降、莫大な量が本州へもたらされ、薬としても利用されました。ほかにも乾した筋子や、クジラの脂肪をあぶって油を抜いた「油かす」のような製品も出荷されていました。

つまり本州の食生活もまた、エキゾチックなアイヌの食文化によって彩られてきたことになるのであり、その影響は、北前船の終点であった関西にとりわけ色濃くおよんだかもしれません。アイヌは日本の庶民と食の世界で共生していたといえそうです。

知られざるアイヌ料理の世界

煮込み料理中心で単調にもみえるアイヌ料理ですが、江戸時代の探検家、松浦武四郎は、油で揚げたシカ肉の団子をアイヌから振舞われています。和人入植以前の伝統的な社会には、多彩なアイヌ料理の世界が広がっていた――。そう考えてみると、楽しい食文化の体験も一味違ったものになるのではないでしょうか。



映画紹介

『エゴイスト』

© 2023 高山真・小学館／「エゴイスト」製作委員会

ハイブランドの服に身を包み、東京でファッション誌の編集者として働く浩輔は、パーソナルトレーナーの龍太と出会い、恋に落ちます。シングルマザーで病身の母を支えるため、龍太は誰にも言えない仕事で生計を立てていました。それを知った浩輔は、月に10万円を渡すから自分を専属の客にしてくれないかと提案します。中学生のころに母と死別した浩輔は、龍太と彼の母親を支えたいと考えたのです。龍太は浩輔の気持ちを受け止めますが、そのために肉体労働と深夜の皿洗いを掛け持ちする体力的に厳しい生活に臨むことになります。

自分の行いは「エゴ」で、その結果龍太たちを却って不幸にしてしまったと悩む浩輔に、龍太の母は「受け取った私たちが愛だと思えばそれでいい」と言います。本作の描く「愛」は、婚姻や血縁によるつながりを制度化し正当化する私たちの社会が、その枠からはみ出す数知れない人の思いを切り捨てながら成り立っていることに思いを至らせます。

■監督・脚本：松永　大司
■2023年製作/120分／R15+／日本　■配給：東京テアトル
■2月10日からシネリーブル神戸で公開　■お問い合わせは、078(334)2126

情報ぷらざ
information

令和４年度「人権のつどい」を開催

昨年12月2日(金)に令和4年度「人権のつどい」を開催しました。この行事は「人権週間(12/4～12/10)」の意義を広く県民に周知し、「人権文化をすすめる県民運動」を一層推進するために行っているものです。コロナ禍の中、感染予防に努め開催しました。この日、兵庫県公館の会場開催と共に、後日オンラインでも配信し、多くの方々に参加していただきました。

「のじぎく文芸賞」の表彰式に始まり、人権講演会では、映画「破戒」の前田和男監督が登壇されました。「映画『破戒』と映画監督が出会った『人権』」と題した講演は、「部落差別は非常にタブー感が強い。しかし『破戒』を通してこの問題について普通に話せるようになり、自分の中の、社会の中の不都合な部分に気づくきっかけになればいいと思う」と話されました。

その後、兵庫県人権擁護推進懇話会座長の五百住満さんをコーディネーターにユースディスカッションが行われ、神戸大学、兵庫県立大学、関西学院大学、武庫川女子大学の学生6人をパネリストに実践発表が行われました。

人権啓発ビデオ紹介 カンパニュラの夢

テーマ 超高齢化社会とひきこもり(8050問題)を描いた人権ドラマ 2020年製作作品

作品内容 この作品は、二つの家族の視点で進行します。主人公の岸本麻帆はあることをきっかけに「ひきこもり」は誰にでも起こり得ることだと気づきます。一方、20年以上ひきこもり状態にある谷口誠一とその両親は問題が長期化する中で、解決の糸口すら見いだせないまま苦悩しています。そして、麻帆は谷口家の抱える問題に寄り添い、解決策を求め行動を起こします。

急速に高齢化が進む今、8050問題は誰にでも起こりうることと認識し、地域の人々がひきこもりなどの悩みを共有し偏見をなくすとともに、互いに助け合うことで地域共生社会の実現をめざす内容となっています。

出演者 宮地真緒、六角精児、山田ルイ53世、白石優愛ほか

■企　　画／兵庫県・(公財)兵庫県人権啓発協会
■上映時間／36分
■企画協力／兵庫県教育委員会
■制作・販売／神広企画株式会社 TEL:078-360-6336

詳しくは
兵庫県人権啓発協会 検索

「ひょうご人権ジャーナルきずな」についてお知らせ

3月号から隔月(奇数月)発行となります。3・4月号はこれまで通り8ページで、5・6月号からはページ数が8ページから12ページへ拡大し、奇数月15日発行となります。

より一層内容の充実に努めて参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

「きずな」は、協会ホームページからもご覧になれます。
兵庫県人権啓発協会 検索

(公財)兵庫県人権啓発協会　〒650-0003　神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360　info@hyogo-jinken.or.jp

2023(令和5)年2月発行